平成三十年 米山没後百十年

風早地方の三輪田米山紀行

豪快で奔放自在な書風から、近代書の先駆と評される三輪田米山。神職仲間や、親交のあった氏子の依頼で、愛媛県中予一帯の神社や、旧家の石碑・祭幟・襖・扇・掛軸等に数多く揮毫しており、ここ風早の地にも米山の足跡は今なお、息づいている。郷土色あふれる当地方の五社を巡ってみよう。

風早米山紀行・指定地①

新田（にった）神社

松山市立岩米之野（旧村社）

【位置】立岩小学校から高縄山登山道に向かって約1㎞で右手に老人ホーム高縄荘が見える。約500m先の高縄山入口看板を右折して立岩ダムの方へ約1.5㎞で左手に鳥居が見える。

① 神名石

表：「新田神社」　裏：明治三十六年十二月 米山書

124×90×56(㎝)　明治36年12月　83歳の作

この神社は南北朝時代、新田義貞公の弟・脇屋義助公がこの地で病疫からの平癒を祈願したことに始まる。ありとあらゆる苦難困難に立ち向かい、信義をつらぬく勇気を授かる神様である。松山市付近では新田社は約三十社あるといわれる。

三輪田米山が新田神社を訪れたのは、最晩年の明治三十六年八十三歳のとき。逗留したS家では、毎日毎日酒を飲ませたのに中々書いてくれなくて往生した。―という逸話が残っている。

しかし米山という人は、単なる「大酒飲みの能書家」ではない。

敬神の念篤く、和漢の古典に精通していたのが米山。書の稽古怠らず、和歌をたしなみ、当時最新の知識にも興味をもち続けて、見識あふれる日記をつけていた。

② 神号額

「新田神社　米山書」

96×62(㎝)

三輪田米山（みわだ べいざん）

本名は常貞。一八一二（文政四）年、伊予松山の日尾八幡神社神官三輪田清敏の長男として生まれ、一九〇八（明治四二）年に没した、伊予の神主である。米山は、明治維新をはさんだ激動の時代に生きながら、王羲之（おうぎし）をはじめとする書の古典に深く学び、独自の書風を形成した。平成十九年一月、「米山顕彰会」が結成され、米山作品の鑑賞・普及また、作品の保存等に力を注いでいる。

三輪田米山 肖像（日尾八幡神社所蔵）

タイトルの「左三つ巴」は日尾八幡神社の神紋

③ 注連石（しめいし）（右）「温故」

④ 注連石（左）「知新」

253×24.5×30(㎝)　明治36年12月　83歳の作

それにしても八十三歳の老体で、こんな奥深い山村にやって来たということは、よほどの事情や思い入れがあったのだろう。

平成二十年六月十五日放送のNHK教育テレビ（当時）日曜美術館では三輪田米山を特集し、この新田神社の石文等も紹介された。

その中で、神名石・神号額の文字である「新田神社」の書の原本が存在することが紹介された。番組制作の過程で判明した事実ということで、本来の持主であるS家から流出し、古美術商の手を経て、今は東京のとある人物のものになっているということである。

なお注連石に刻まれた「温故知新」の文字は、現代書家の横田無縫先生が、特に高く評価なさっている。さらに書風としては、空間や粗密の効果を存分に出し、威風堂々とした素朴な楷書である。

拝殿には、右に新田義貞公、左に八岐大蛇の絵馬が飾られており、小さな社ではあるが、米山の書が四点もあることは特筆すべき事実である。

「温故知新」　出典『論語』
前に学んだことや古い言葉をもう一度よみがえらせて、新しい真理を悟ること。

⑤ 鳥居（右）

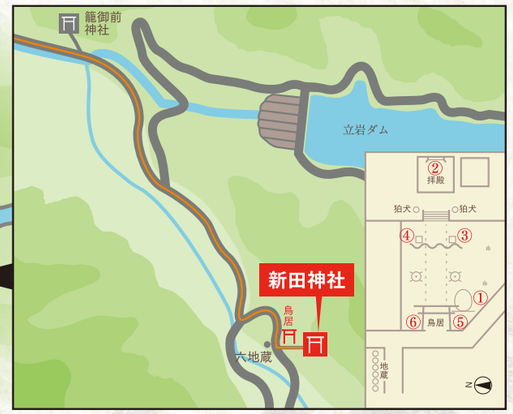
表：「修徳」　裏：キクマ石工
田中勇太郎

⑥ 鳥居（左）

表：「立義」　裏：明治三十六年十二月
時 米山八十四

「立義」101×28(㎝)　「修徳」94×32(㎝)　明治36年12月　83歳の作

「修徳立義」　出典『易経』
徳を修めて、筋道を立てること。



風早米山紀行・指定地②

籠御前神社

この神社は、登記上は「籠御前社」。御祭神は「河野霊」とされている。

この山の上にあった十九地山城の城主白石若狭守（河野好峰の孫）の霊を、元和年中に末裔白石四郎左衛門が、鎮守として奉祀した。

注連石に彫られた「大順成徳」の文字が米山の書。特徴としては「大」と「成」のように空間の広がりにおもしろ味がある。媚びず驕らず信念に生きた米山の、これが最晩年の揮毫である。

付近の庄屋宅に一ヶ月近くも長逗留して書いたものとされる。この文字は徳川神社（津吉）・松山神社（祝谷東町）・河内神社・高正神社（東明神）にも遺されている。出典『礼記』『易経』。

松山市立岩米之野（旧村社）

【位置】立岩小学校から高縄山登山道に向かって約1㎞で右手に老人ホーム高縄荘が見える。約500m先の高縄山入口看板を右折して立岩ダムの方へ約500mで右手に公民館が見える。左側の道を徒歩で約100mのところに神社がある。

⑦ 注連石（右） 表：「大順」 裏：キクマ石工　田中勇太郎

⑧ 注連石（左） 表：「成徳」 裏：明治三十六年十二月 米山書

265×27.5×23（㎝）　明治36年12月　83歳の作

風早米山紀行・指定地③

國津比古命神社

★新調された案内看板（國津社頭）

平成27年12月18日　風早米山紀行指定第一号看板が設置された。平成29年度迄に残り4ヶ所にも設置予定。

松山市八反地（延喜式内社・旧県社）

【位置】松山市から196号線を北に約18㎞で左手に聖カタリナ大学が見える。手前に國津比古命神社入り口の看板が見えるので右折して約1.2㎞直進し正岡小学校を過ぎると鳥居が見える。向かい合う櫛玉比賣命神社は共に式内社で、社格は旧郷社である。

この神社には幕末から明治にかけて活躍した伊予の能書家二人の揮毫石碑がある。松山市久米の日尾八幡神社（「旧県社」）の神官であった三輪田米山（一八二一～一九〇八）の記念碑は手水舎手前にあり、

表面：式内名神両社千年祭之碑　　裏面：明治三十一年八月

と書かれ、明治三年（一八九八）米山七十八歳、晩年の作である。国家編纂の古社・名社百科事典とも呼ぶべき『延喜式神名帳』は、平安時代に上撰された『延喜式』の巻九・十のことで、当時から「官社」として朝野の尊崇すこぶる厚かった全国の名だたる神社を選抜・集大成したものである（「延喜の制」）。ちなみに「明治の制」では、由緒深く格式の高い古社であることから、当局より当初「国幣中社」の打診がなされたが、結局「県社」に列せられている。この由緒ある『延喜式』の台帳に御夫妻神（國津比古命神社・櫛玉比賣命神社）揃って登載されたことは、平安の御代から大変名誉なことだったことであろう。（今に「式内社または式内名神」と尊称される由縁）それから千年、明治を生きた当時の人々は「千年祭」を祝い、さらにこれを後世に伝えんと記念碑建立を発起した。僧明月、僧懶翁とともに「伊予の三筆」として名声の高かった米山に、雄渾な筆を振るってもらうことにしたのであろう。酒豪で知られ、無心の境地で筆を握る米山らしい楷書で豪放磊落な書風が窺われる。ちなみに江戸中期の「松山藩の三筆」は、蔵山、明月、伊藤子礼である。また拝殿内部には、今治藩御用絵師であった山本雲渓作の絵馬「虎退治の図」と、画題不明だが文久二年の絵馬一対が奉納されている。

この米山の師匠ともいうべき存在が、伊予松山藩第十一代藩主松平定通（老中として「寛政の改革」を行った陸奥白河藩第三代藩主松平定信は叔父）に仕え、藩校「明教館」（現県立松山東高等学校の敷地の一画に移築）の開設に尽力、初代教授として長らく藩士の子弟教育に心血を注いだ日下伯巌（一七八五～一八六六）である。太鼓橋前に屹立する豪奢な稚児柱付き親柱方式の注連石左右には、米山

愛媛県下第四番目に古い鳥居。笠木・島木は二つの石からなり継ぎ手が無い手の込んだ造り。延宝九年（1681）の建立。

⑨ 記念石　表：「式内名神両社千年祭之碑」

記念石　裏：「明治三十一年 八月」

230×29×21（㎝）　明治31年8月　78歳の作

⑩ 注連石（右） 日下伯巌伝書

「う禮し具毛　松の梢尓立寄天　久しく爰に　民を守ら舞」

⑪ 注連石（左） 日下伯巌伝書

「千早振　神の五十鈴の加わら須も　免くる月日能　影のさやけさ」

360×40×30（㎝）　嘉永7年8月　伯巌69歳の作

とは、誠に対照的な伯巌伝書とされる優美華麗な草書体の和歌二首が彫られている。ともに風早宮大氏神の「国安かれ、民安かれ」と遍く拡がる「願成就」の御神徳を長しえに称え、御社頭のますます高からんことを願う畏敬の念が込められている。

南側：【原文】う禮し具毛　松の梢禾立寄天　久しく爰に　民を守ら舞

【訓読】うれしくも　松の梢に立寄りて　久しくここに民を守らむ

【大意】老松が覆い尽くすこの國津の杜を訪れ、大神に参拝できたこのうれしさよ。伊予国随一の大社であるこの社の神様は、太古の昔から風早の里の人々を守ってこられたのであろうなあ。

【裏面】八月吉日建立

北側：【原文】千早振　神の五十鈴の加わら須も　免くる月日能　影のさやけさ

【訓読】千早振　神の五十鈴のかわらずも　めぐる月日の影のさやけさ

【大意】物部の神らしく荒々しい神成を発動されるこの社の大神の前を流れる五十鈴川の流れは、尽きることがない。煌々たる満月を仰ぎ、この明るさは人間の命を超えたものかと気付かされる。月日は移ろい時代は変わろうとも、月は照り続けるであろう。永遠の神徳に感動しきりである。

【裏面】嘉永七甲寅年

風早米山紀行・指定地④

高縄神社

松山市宮内（国史見在社・旧県社）

「日本三代実録」に「貞観五年九月二五日甲寅援伊予国正六位上高縄神従五位上」と所載されている古社

【位置】 松山市から196号線を北に14㎞で府中交差点を右折して約100mで右側に保育園があり直進後、最初の交差点を左折して若宮橋を渡り右折。河野小学校の手前を左折し約260mで鳥居が見える。右折して正面に神社が見える。

西園寺公による神名石は均整のとれた端正な楷書である。

この神社にある米山の石碑は寄附石である。石段を登ったところ、神門の手前、向かって左にある。

寄附者は西園寺公望公。それを顕彰する寄附石の文字を、三輪田米山に揮毫してもらった。「一金五拾円」となっているが、西園寺公に五十円もらったのではない。

これについては、高縄神社が県社に昇格したことにまつわる秘話（社司の苦悩）が伝えられている。

明治御一新に伴う一郷一社の定則により高縄神社は郷社に列格し、明治二十八年には県社に昇格した。この年の高縄神社春季大祭（四月二十四日）は、県社昇格奉祝大祭として斎行。当時の人口は今よりもずっと少なかった筈なのに、境内は「立錐の余地無き」有様だったと、社司の玉井安盛が手記に書いている。

その玉井安盛と三輪田米山は、神職と教導職とを兼ねていた。その年（明治二十八年）米山七十五歳で安盛は五十三歳。教導職の級位は米山が少教正（しょうきょうせい）で安盛は中講義（ちゅうこうぎ）であった。教導職は、大教宣布（たいきょうせんぷ）（明治三年の詔による）を推進するため明治五年、太政官布告により教部省の管轄下で当時の神職や僧侶などから選び補任された。しかし、神道と仏教とで対立し、さらに神道十三派が分派独立。神道本局（後に神道大教と改称）の教導職も明治十五年には、神官との兼補廃止ということになった。神官とは神職の呼称のひとつだが、この頃には官社（官幣社・國幣社）の神職を意味するようになっていた。その点、三輪田米山や玉井安盛は諸社（県社・郷社・村社・無格社）の神職であったため、教導職の兼務を続けることが出来たのである。

明治二十八年七月五日に、三輪田米山は教導職として当神社の昇格を祝し『懸社高縄神社』と揮毫した。落款は、「少教正大神常貞書」となっている。

揮毫の日は『米山日記』でわかる。（米山日記は後に三輪田家を継いだ人らが売却して散逸したのを浅海蘇山（あさうみそさん）先生が蒐集（しゅうしゅう）なさり、昭和四十四年八月三十日に発行の大著『米山―人と書―』に収録掲載）その大著四二六ページに、このことが出ている。

ところが、神名石（高縄神社の鳥居もとにある）には、その米山の書ではなく西園寺公の書が刻まれた。

表に「明治二十九年八月四日於東京」とあるのに、裏面には大きく「明治二十八年五月立之／氏子中」と書かれている。

側面には、社司（現宮司の曽祖父）に続いて社掌が三人、計四人が神職として名を連ね（当時は社家が四軒あった）、それに氏子総代と石工の名前が記されている。

昇格を祝し三輪田米山が『懸社高縄神社』と揮毫してくれた。なのに神名石の文字は、西園寺公に書いてもらった。その謝礼を受け取られなかったから寄附を戴いたことにして、また米山に、こんどは寄附石の文字を書いてもらったというのである。

⑫ 神名石

表：明治二十九年八月四日於東京 縣社高縄神社
文部兼外務大臣従二位勲等侯爵 西園寺公望謹書
裏：明治二十八年五月立之氏子中

⑬ 寄附者名石

表：「一金五拾円 文部兼外務大臣従二位勲一等侯爵 西園寺公望殿」
大臣名等の小字は石文として大変珍しいものとされる。

寄附者名石　裏：「明治二十九年八月二十三日」

320×46×36（㎝）
明治29年8月23日　76歳の作

諸用日記（三輪田常貞自記）
（愛媛大学図書館所蔵）

風早米山紀行・指定地⑤

正八幡神社

松山市小川（旧村社）

【位置】 松山市から196号線を北に約10㎞で小川交差点を右折して約100mで三叉路に出る。左の細い道を約200mで右手に鳥居があり、奥に拝殿が見える。

この神社は古くからの鎮座で、越智一族が崇敬した。口碑によると、応永の昔、畠山家の近侍落馬の事故により、畠山家より数次にわたって代参奉幣があったと伝えられる。

主祭神「誉田別皇命（ほんだわけのおおのみこと）　足仲津彦（たらしなかつひこ）　気長足姫命（おきながたらしひめのみこと）」

注連石、向かって左側には「鳥遊於雲（鳥は雲に遊び）」裏面には氏子中、発起　大森盛壽。石工　岡見新平。右側には「魚游於水（魚は水に游び）」とあり、裏面には、明治十七年甲申年九月十五日、周旋人として玉井又一・栗上庄作・作道重平・有田栄五郎の記銘がある。三輪田米山六十四才の書である。

注連石、右側「魚が遊び」は「しんにょう」が「さんずい」になっており、米山の遊び心がうかがえる。右上がりの気字壮大な線条で豊潤な筆触を感じさせる書である。この碑文の意味は「森羅万象生き生きとした生命がある」ということで、日尾八幡神社の「鳥舞魚躍」、伊予豆比古命神社（椿さん）の「龍遊鳳舞」と共に大意は同じである。なお拝殿内には、熊谷直実（くまがいなおざね）の「二谷嫩軍記（ふたやのわかいぐんき）」に出てくる「平敦盛、青葉の笛」の有名場面を絵馬にして奉納されている。

正八幡神社の注連石から正面を見ると、ご神体である宅並山（たくなみさん）が見える。ふり返ると斎灘には寒戸島が見えることから、神戸（かみど）から寒戸に変化したものか。石段は、鳥居下八段、中二十二段、上五段あり横長さ三ｍ七十㎝高さ二十㎝・奥行二十二㎝全て通しで中に三本折れる。なお正八幡神社は、文政四年（一八二一）の地図によると、当時は宅並山の頂上にあり、現在の神社のある場所は遥拝（ようはい）所であった。

⑭ 注連石（右）「魚游於水」

⑮ 注連石（左）「鳥遊於雲」

500×52.5×28（㎝）　明治17年9月15日　64歳の作

出典『孔子家語』